

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 17 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370791

研究課題名(和文)近世近代防長両国における日記の基礎的研究

研究課題名(英文)Basic study of the diary in Suou and Nagato in the early modern times and modern times

研究代表者

三宅 紹宣 (MIYAKE, Tsugunobu)

広島大学・教育学研究科・名誉教授

研究者番号：10124091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近世・近代における防長両国における日記を分析することにより、次のことが明らかになった。(1)幕末期の防長村落では、対外的危機が発生し、また、貿易によって物価騰貴が起こった。そのことを背景として、西洋列強に対抗する勢力への支持が広まった。(2)1863年、長州藩は西洋列強を打ち払った。幕府は、長州藩を弾圧した。1864年、長州藩内部で幕府へ恭順する勢力が台頭し、早い段階で、幕府へ対抗する勢力の弾圧を決定した。(3)1867年、長州藩は、討幕のために薩摩藩と協力して出兵を行った。

研究成果の概要(英文)：Next became clear by analyzing the diary in Suou and Nagato in the early modern times and modern times.(1) In the Bocho village of the late Tokugawa period, Western impact occurred, and prices began to rise by trade. The people supported a power against the Western Great Powers.(2) In 1863, the Choshu-Han brushed off the Western Great Powers. The Shogunate oppressed Choshu-Han. In 1864, the power which did allegiance to the Shogunate in Choshu-Han gained power. They decided to oppress power to be opposed to the Shogunate at an early stage.(3) In 1867, the Choshu-Han sent troops in cooperation with Satsuma-Han to attack the Shogunate.

研究分野：明治維新史

キーワード：近世史 近代史 史料学 古文書学

1. 研究開始当初の背景

防長両国の近世から近代への移行については、明治維新史研究の問題関心からこれまで膨大な研究が蓄積されてきている。とりわけ維新変革過程については、緻密な研究によって深められ、活発な研究論争が行われている。しかし、明治維新における変革の評価は、研究者の理論に引きつけられ、客観的なものとなっていない。かかる現状を克服するためには、幕末維新时期から明治期にかけて、長期間にわたって書き継がれた日記を発掘し、日常生活がどのように変化したのかを具体的に解明するのが有効である。かかる目的を達成するために、防長両国における日記を発掘し、基礎的な分析を行うことにより、明治維新史研究を深化させる必要がある。

2. 研究の目的

長州藩を対象にした幕末維新时期の政治過程の研究は、後世に編纂された史料を用いた研究が多く、当時の実務文書や日記に基づいて、根本に遡って分析した研究は少ない。また、政局史が中心であって、村落の視座から広く社会全体の変動を基盤に据えて近代社会を見通すものは少ない。本研究は、これらの研究方法上の克服を図りつつ、客観的な維新変革像を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 日記の発掘による近世から近代への社会変動の実態解明。日記は日々の現実を書き継いでいくものであるだけに、長期間にわたって分析すると、その期間における社会の変化の状況がリアルに判明する。近世後期から明治期にかけて書き継がれた、下関近郊の豊浦町宇賀本郷の在村医古谷道庵の日記(全115巻)等、防長各地域の庶民の日記を用いて生活の変化を追跡し、研究の深化を図る。

(2) 日記による歴史的諸事実の確定。幕末維新は、政治的激動が続き、混乱状況の中で記された史料には、日付等異なる記述がある場合がある。そのような場合、日々書き継がれた日記は、諸事実の確定に有用である。これについては、幕末期にあつては、藩庁中枢で活躍した浦鞆負の日記、柏村信の日記を分析することで明らかにし、さらに政策決定過程を精緻に解明する。

4. 研究成果

(1) 近世・近代防長両国における村落動向の研究

近世・近代防長両国における村落動向について、「古谷道庵日乗」を分析して解明した。古谷道庵は、長府藩領の宇賀本郷で、幕末期から明治初期にかけて地域の医療にあたり、子弟の教育にも力を尽くした。道庵は、天保7年(1836)に日記を書き始め、明治11年(1878)に死去する直前まで43年間にわたって書き継ぎ、115巻、総丁数

6186丁にも及んでいる。内容は、医療、教育、政治動向、気候、天変地異、物価、対外的危機意識、民俗など多岐にわたっている。分析の結果、次のことが明らかになった。

対外的危機意識の発生と展開

幕末期における西洋列強の外圧に対して、民衆のレベルでの体的危機意識は、嘉永2年(1849)から発生する。「古谷道庵日乗」嘉永2年12月12日条に、外圧に関する記事が初出し、対外的危機意識が発生している。ついで嘉永6年(1853)のペリー来航は、異国船襲来が現実のものとなった画期であり、防長両国にも伝えられて、人気騒然となっている。さらに、対外防備状況が伝えら、民衆の恐怖心が強まり、全国的な対外的危機意識の発生がみられる。

開港と物価騰貴

安政5年(1858)のアメリカをはじめとする五カ国との通商条約の締結にともない、翌安政6年6月から貿易が開始された。これによって様々な影響が、防長両国においても発生している。万延元年(1860)には、金価・塩価が高騰し、その原因を異国船の来航・貿易によるものであるとする風聞がみられる。文久元年(1861)5月、下関へイギリス艦4隻が長期来泊し、無断測量を強行したため、対外的危機が発生し、物価が騰貴している。物価動向と生活について、道庵は詳細に記録しており、生活を困窮化させている幕府に対する厳しい批判意識が存在している。

長州藩の攘夷決行と対外的危機意識の高揚

開港による物価騰貴は、諸階層の幕府批判を強め、尊王攘夷運動が高揚した。この動きの中で、長州藩は文久2年(1862)7月、藩是を即今攘夷へ転換し、その決行のための準備を進めた。対外防備政策は、次第に村落へも浸透していき、文久3年(1863)になると攘夷意識が村落において形成された。

文久3年5月10日を期して、長州藩は下関海峡においてアメリカ商船を砲撃して攘夷を決行した。ついで5月23日、フランス艦、26日、オランダ艦を砲撃した。このような動きの中で、夷賊退散の祈願が行われた。また、異国船との砲撃戦において、マジカルな幻想が発生し、それを契機に祭りが行われており、戦勝を期待する民衆意識が存在している。

6月1日にはアメリカ軍艦、5日にはフランス軍艦による下関攻撃が行われた。その砲撃の激しさと、外国人の敏速な戦いぶりに危機感が高まり、長府では、町民の避難が行われている。このような危機の高まりの中で、海辺に位置して海からの攻撃に弱い萩城の山口城移鎮、長府御殿の田倉城移鎮が本格的に取組まれた。築城工事へは民衆の参加があり、村落から献夫が積極的に行われたことを道庵は伝えている。

幕長戦争と民衆意識

元治元年(1864)7月19日の禁門の変を起こした責任を追及するため、23日征長令が発せられた。この第一次長州出兵に対し、道庵は、征長は夷気が加わったためであると、長州出兵と外圧を結びつける認識を示している。

慶応元年(1865)4月13日、幕府は再び長州征討を令し、第二次長州出兵が行われることになった。長州出兵について、長州藩の民衆は、外圧と結びつけて認識し、幕府が西洋列強に託して長州藩を攻撃するとの風聞があった。

慶応2年6月7日からの幕長戦争では、戦争に備えて村落の防備が取り組まれ、村兵のレベルにいても弓槍から銃砲への転換を完了している。また軍夫については、大量の動員が成されている。これに対し、征長軍側では軍夫徴発への民衆の抵抗や軍夫の逃亡があいつぎ、有効な戦闘体制が組み得ていない。この兵站の差は、その勝敗に大きな影響を与えた。

幕長戦争において長州藩が勝利したことは、民衆の長州藩支持の動きを更に強めた。慶応3年4月には、長州藩が攘夷を行ってくれとして民衆の期待を集めている。攘夷実行者としての長州藩を支持する民衆の動きがあったことが伝えられている。

明治初期の排外意識

慶応3年12月9日、王政復古政変によって維新政権は発足する。そして翌明治元年(1868)1月、維新政権は開国和親方針を打出していった。表向き攘夷を標榜していた薩長勢力を中核とする維新政権が、開国和親方針を表明したことは、その攘夷方針なるが故に支持してきた民衆にとっては、受け入れがたい出来ごとであった。民衆の間での排外意識は、明治期になっても根強く残存した。

明治4年7月14日、廃藩置県が断行され、旧領主は全て東京永住を命ぜられた。その引留めの動きが各地で起こり、騒然とした状況となっている。旧領主引留めの動きは、この時期の西日本一帯で激烈な百姓一揆となって頻発した。旧清末藩領においては、9月25日より豪農層への打毀しをともなって蜂起している。その要求書には、明治政府と異国人の結託が批判され、異国人の排除が要求されている。このように旧領主引留めの動きは、民衆の根強い排外意識が底流にあった。

文明開化の浸透

民衆の排外意識は、西洋文明の浸透とともに徐々に弱まっていった。たとえば、明治7年(1874)には、牛肉食が普及する動きが見られ、牛肉に対する抵抗が次第に弱くなっている。太陽暦については、明治6年の改暦実施後も日常生活には定着していないが、明治9年(1876)には、新暦正月の休業が命令され、その普及がはかられている。そのため明治10年(1877)の旧正月にあたる日には、村人が労働する動きがみられるようになっている。

以上のことにより、民衆の対外的危機意識の発生・深化・高揚が、社会の底流となり、幕末期の政局に重要な影響を与え、近代国家形成に貢献していることが明らかになった。また、民衆の対外的危機は無かったとする学説が、事実とは異なることが証明された。

(2) 長州藩元治内戦期の政治動向に関する研究

長州藩元治内戦期の政治動向について、「児玉惣兵衛日記」を分析して、保守派と改革派の対抗関係の内実を解明した。長州藩元治の内戦の従来の研究は、諸隊側の視点を中心として分析してきたため、萩藩庁側の内情については、ほとんど解明されていない。萩側の動向を克明に記録した「児玉惣兵衛日記」により、内戦の総合的究明が可能となった。児玉惣兵衛は、大組士で700石。天保年間より手廻組頭、記録所役等を勤め、公用記録・私用記録を多数残し、現在9冊に編綴されている。

元治元年11月14日、諸隊が、幕府への絶対恭順の方針に従わない事態に対する萩藩庁の対策会議が、重臣を総動員して開催されたが、諸隊が承服しない場合は、軍勢をもって討ち果たしてでも処置をつけるべきとする強攻策が出され、既に多くの同意を得ている。さらに12月7日、御前会議において、五卿の筑前藩への引き渡しに対し、諸隊が妨げる場合は討ち果たすべきという強硬論が出され、武力鎮圧の方針が固まっている。

従来、高杉晋作が12月15日深夜決起したから諸隊に対する武力鎮圧方針が出された誤解されることが多いが、高杉決起以前から、やむを得ない場合は諸隊を討ち果たす方針が決定していたことが解明できた。

(3) 長州藩慶応軍制改革と武士団の解体
長州藩慶応軍制改革と武士団の解体について、「児玉惣兵衛日記」を分析して、特に武士と従者のユニットの解体過程について明らかにした。慶応軍制改革は、従来、諸隊の研究が中心であったが、家臣団の主人と従者のユニットを解体し、従者を差し出させて藩庁が一括管理し、西洋式軍隊に編制する改革が重要な意義を持っている。その実態について、児玉惣兵衛の従者の場合についてその変遷を追跡した。

児玉家は、700石の大組士であり、軍役は12人である。慶応元年(1865)9月11日、軍役改定にかかわって命じられた、かねてから召し抱えていた家来11人(小者1人を含む)の姓名、年齢を届け出た。このうち2人は老年であるため、慶応軍制改革の軍役対象から除外された。児玉家の軍役は12人なので4人不足していた。そのため24日、銃手8人は差し出すが、4人分の預かり石、兵卒1人に付き米6石3斗宛、4人分として25石2斗を上納することを支配所へ願い出た。その後12月3日になって、新た

に4人召し抱えたことを姓名、年齢を付して届け出、預かり石を免除してもらえるようお願いした。さらに25日、小銃12挺を従者12人に整備したことを届け出た。児玉の願いは認められ、29日、預かり石25石2斗の切手を受け取っている。

このようにして差し出された軍役の兵士は、完全に主人から切り離され、銃士として従軍した。慶応2年6月17日、第五大隊8小隊を山口に出陣させるにあたり、児玉の家来8人は、1番小隊に所属して差し出された。さらに21日、第五大隊の内、1番、2番、7番、8番の4小隊は幕長戦争芸州口の戦いに出陣し、児玉の家来も従軍した。1番小隊は、児玉惣兵衛人数8人、ほか9人の大組士の従者、合計36人から編制されていた。第五大隊は、諸隊とともに芸州口戦争を戦い、長州軍の一角を担った。

(4) 慶応3年長州藩東上出兵と討幕に関する研究。

慶応3年長州藩東上出兵と討幕について、「柏村日記」や「三藩連合東上一件(楯取素彦の日記体の編年史料)」等を分析して、討幕への過程を具体的に明らかにした。慶応3年の長州藩および薩摩藩の東上出兵については、政局が紆余曲折しており、その真相が解明されてこなかった。そのため近年は、討幕は無かったとする説も出るような状況となり、学説が混迷している。その克服を図るため、「柏村日記」等の一次史料を分析して、討幕への過程を具体的に明らかにし、小さな勢力が巨大な政権に立ち向かうために状況に応じて妥協・修正はあるものの、討幕の基本方針は貫徹していることを実証した。その要約は以下のごとくである。

薩摩藩の討幕方針は、慶応3年5月23日から24日の朝議において、長州処分を寛大なものにし、幕府が反正するという薩摩藩の主張が認められなかったことを契機として決断された。翌25日、薩摩藩京都藩邸において、長州藩と共に事を挙げる議がほぼ定まった。

山県有朋と品川弥二郎は、6月16日、島津久光から拝謁を命じられた。久光は、これまで周旋について尽力してきたが、幕府は不条理を申し詰めるため、この上は大いに尽力をする以外に手段が無く、山口へ西郷を派遣するつもりであると、その決意を述べた。山県は久光に拝謁後、小松帯刀から今後の方針についてより踏み込んだ形で聞いた。小松は、薩長が協力し、大義を天下に鳴らすために、西郷を山口に派遣し、相談したいと述べた。さらに薩摩藩の戦略について、天勅を奏請し、幕府年来の罪逆を正し、朝廷の基本を立てると答えた。山県と品川は長州藩に帰り、京都での薩摩藩の戦略を復命した。

この復命の趣旨は、長州藩政府を通して岩国藩にも伝えられた。薩摩藩が示した挙兵計

画は、長州藩ならびに岩国藩において公式なものとして異論なく受け止められている。

薩土盟約は、慶応3年6月22日、京都において薩摩藩から小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通、土佐藩から後藤象二郎・寺村左膳・真辺栄三郎・福岡孝弟の両藩首脳が会合し、それに坂本龍馬・中岡慎太郎が陪席し、後藤の大条理の策を薩摩藩側の3人が了解し、締結された。その後、7月3日、後藤等は土佐藩に帰って山内容堂に説くため京都を出発した。その返事を待つ必要が生じたため、西郷の山口行きは中止となった。西郷は、書簡で薩土盟約の内容を長州藩に伝えた。長州藩は薩土盟約を了承し、岩国藩にも伝えた。

長州藩は、西郷の来藩が不可能となったので、7月19日、柏村教馬を薩摩藩京都藩邸に派遣し、藩として公式に討幕戦略を協議させることにした。26日、柏村は、毛利敬親・元徳父子から久光宛の親書を受けた(「柏村日記」)。親書では、薩摩藩の尽力への感謝が述べられ、藩主親書という最も重い形式で薩摩藩の戦略への賛意が表明されている。

柏村は上京し、8月14日、小松の寓居で西郷・大久保も臨席して会談が行われた。薩摩藩は戦略について、「現在薩摩藩京都藩邸に1000の兵があり、期が定まったら3分の1を以て内裏の守衛に宛て、この時、正義の公卿をして残らず参内させ、他の3分の1を以て会津藩京都藩邸を急襲し、残り3分の1を以て堀川付近の幕府兵の屯所を襲撃させる。かつ急いで鹿児島に報じて3000の兵を急いで出兵させ、その兵を以て大坂城を抜き、軍艦を撃沈し、さらに薩摩藩江戸藩邸詰の兵約1000人を水戸藩の浪士等とともに甲府城に籠らせ、幕府旗下の兵が京都に支援することを阻止する策である」と答えた。さらに、「三都において一時に事を挙げる予定であるが、勝敗は予め期することはできず、薩摩藩が斃れるときは遺志を継承して起つ藩もあるだろう」と、困難な計画ではあるが、薩摩藩が敗戦した場合は、後に続く藩へ期待することを表明した。つまり、緒戦での勝敗よりも、一挙することにより状況を切り開くことを重視している。

さらに薩摩藩は、「この一挙はもとより幕府の不意を突く必要があり、薩摩藩においてもわずかに二・三人が計画に関与するのみであり、極密に事を運ぶため、公卿にも当日に到って初めて知らせる。そして薩摩藩においては討幕は行わない予定であるが、一挙の後、時宜によっては將軍を討つ論旨を奏請する」と、戦略を語った。ここで薩摩藩は討幕は行わないと言っているのは、薩摩藩一藩のみで単独では討幕は行わないという意味である。それは、この次に述べている土佐藩の出兵を待っているという戦略からもわかり、この文言を根拠にして薩摩藩の討幕を否定する見解は、「柏村日記」の誤読である。

薩摩藩は、「今日まで延引したのは、土佐

藩が兵力を出すという後藤との約束があるからであり、万一、土佐藩が同力しないときは、薩摩藩一手によって事を挙げる」と、決意を告げた(「柏村日記」)。

柏村は、山口に帰って復命し、それを受けて8月29日、御前会議が開かれた。翌30日、軍備の準備を本格化することが命じられた(「久保松太郎日記」)。

薩長両藩の東上出兵は、9月18日、大久保利通が山口に来て、長州藩主以下の重臣を会談したことにより着手された。会談内容は、「大久保利通日記」や「柏村日記」に詳細に記録されており、双方の認識に矛盾はない。

ここに薩長両藩兵の東上出兵の同盟が締結された。その細目は、薩摩藩は来る25日頃、兵士を搭乗させた軍艦および長州藩に貸与する軍艦を三田尻に寄港させ、長州藩家老の発途の準備が整うのを待って薩摩藩軍艦が先ず出港し、長州藩・広島藩の兵が乗組む軍艦より一日先んじて大坂に着くこと等であった。

出兵同盟に規定した薩摩藩軍艦の三田尻到着は、予定より大幅に遅れ、10月6日となった。東上出兵軍参謀楢取素彦は、直ちに訪れ、「失機改図」に変更した事情を告げた。翌7日、山口から柏村が三田尻に出て、幕府の不意を突くという戦機を逸したため、方略変更を説明した(「柏村日記」)。

方略変更は、京都まで伝えられて薩摩藩の了承を得た。薩摩藩軍艦の遅延は、鹿児島における保守派の台頭によるものであり、その対策のために、挙兵名目のための論旨の交付を願ったのが、いわゆる「討幕密勅」である。密勅は長州藩と薩摩藩にもたらされて出兵の名目を得、東上出兵が取り組まれた。

11月17日、薩摩藩の軍艦が三田尻に入港した。毛利元徳は、直ちに三田尻に出て、翌18日、島津忠義と会見した。東上の日程協議が行われ、11月28日を期し、京都において挙兵、その機に乗じ、西宮駐屯の長州藩兵隊入京などが取りきめられた。

11月になると、京都において徳川慶喜は大政奉還によって人気を回復したため、討幕方針は修正を余儀なくされた。その結果、賛同可能な勢力も動員して、12月9日、王政復古政変が行われた。しかし、幕府の経済力が諸大名より上位にあることは、再び政権を掌握する危険性があるので、納地を実行させる必要があった。薩摩藩は納地を主張したが、公議政体派の大名は反対し、薩摩藩は孤立した。この時、長州藩も納地に反対したとの見解があるが、これは「柏村日記」の誤読である。長州藩は罪として納地をさせるべきではなく、大義の名目で納地させるべきといっているものであり、納地には賛成しているのである。

新政府における薩長両藩の孤立と苦境は、大坂の旧幕府軍の京都進発と、鳥羽伏見の戦

いの勝利によって克服されていった。

(5)長州藩奇兵隊の教育と戦術に関する研究。長州藩奇兵隊の教育と戦術について、『奇兵隊日記』、「御国難日記」を分析することにより具体的に解明した。長州藩奇兵隊の研究は、性格規定を巡っての議論が中心であり、組織や兵士の実態については明らかにされていない。そのため、有志として多様なレベルの者が入隊してくる兵士を育成し、その活力を引き出していくシステムを解明し、その教育内容について、生兵、小隊、大隊、散兵など各習熟度段階の教練書を分析することあわせて、奇兵隊の戦術の特質を明らかにした。この度翻刻した「御国難日記」は、奇兵隊士武広遜が、元治元年から2年にかけて日々書き継いだ日記である。武広遜は、禁門の変と下関戦争の敗戦という長州藩の国難の中で、幕府にひたすら恭順する俗論派が台頭し、諸隊の弾圧が行われる状況下で建白と抵抗を続け、やがて元治の内戦に勝利し、藩論を回復するまでの動向を克明に記録した。日記は、兵士の視点から政治激動を記録したものであるとして貴重であり、農民出身者で、努力により実力を蓄え、士官になっている例として注目される。

分析の結果、次のことが明らかになった。奇兵隊は、文久3年(1863)6月7日、有志による実力主義の軍隊として成立したが、元治元年(1864)8月5・6日、四国連合艦隊との交戦までは、銃隊、砲隊、弓隊、槍隊が混在する和洋混交の隊であった。

結成から伍組織を単位として編制され、小隊を編制することもあった。

結成からの戦術は、神器陣等の旧式なものもあったが、小隊単位の西洋式戦術も学ばれた。

多様な能力を持って入隊を志願する者に対し、力量不足の者には、まず附属に入れ、そこでの勤務態度や訓練の習熟度を判定して、本隊に入隊させた。一方で、附属は、兵士の降格処分の場合にも用いられた。

奇兵隊では、文武兼修で、文学等の教養教育も重視された。教養教育重視の理由は、実力主義であったため、だれでも指揮官になれる途が開かれており、指揮官としての起案などに不可欠の学力を習得していくためと推測される。

四国連合艦隊との交戦を通して、散兵戦術とミニエル銃の優秀さを体験し、以後は、西洋式戦法の習熟が、生兵を特別に訓練するなど、各段階を配慮した訓練によって目指された。

西洋式戦法の習熟の成果は、元治の内戦において発揮され、諸隊が藩庁鎮静軍に勝利する一因となった。

慶応元年(1865)年3月23日、抗幕政権が成立すると、諸隊は藩庁軍事組織に公式に位置づけられ、西洋式軍事編制への徹底が図られた。

西洋式戦法の徹底と習熟は、慶応 2 年 (1866) の幕長戦争において、散兵戦術の駆使となって威力を発揮し、征長軍に勝利する一因となった。

以上の改革を推進するに当たり、兵士の活力を引き出す教育システムとして、附属、生兵塾、育英舎、待賢舎、時黄舎があり、兵士の習熟度に応じた細やかな教育が行われ、実力主義を貫くことにより、兵士の能力を効果的に高めた。

(6) 五榜の掲示と木戸孝允に関する研究。五榜の掲示の作成者については、これまで不明であったが、木戸孝允の未翻刻草稿類を精査することにより、木戸が何度も手を入れ修正した草稿を発見し、五榜の掲示第四札・第五札に結実していく過程を明らかにした。第一札から三札は、江戸幕府の法を使用しているが、複雑な幕府法を否定し、簡潔な法のみとする新政権の方針を周知させるねらいがあった。なお、第三札の修正は木戸自身が行った。誓文と宸翰は、木戸の手によって作成されたことは既に研究発表したが、これに五榜の掲示は木戸によって作成されたものであるという事実を踏まえると、三者の一体性がさらに確かなものになり、木戸の開明的政治思想が貫徹していることが明らかになった。

(7) 幕長戦争と厳島に関する研究。

幕長戦争については、これまでは戦場となった西国街道を中心とする内陸部側の研究が主であったが、厳島神社の「野坂家日記」を分析して、征長軍の周防大島出陣の基地となっている様相、厳島に避難している内陸側住民の生活状況、対岸に見える幕府軍と長州軍の戦闘方法の違いと比較、厳島講和の状況等、戦争と厳島のかかわりについて総合的に解明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

三宅紹宣、幕長戦争と厳島、厳島研究、査読無、13 巻、2017、1-10

三宅紹宣、慶応三年東上出兵と防府、佐波の里、査読無、45 巻、2017、21-26

三宅紹宣、五榜の掲示と木戸孝允、山口県地方史研究、査読有、116 巻、2016、60-66

三宅紹宣、児玉惣兵衛日記(抄)、山口県史研究、査読有、24 巻、2016、71-83

三宅紹宣、奇兵隊士武広遜「御国難日記」(抄)、山口県史研究、査読有、23 巻、

2015、83-96

〔学会発表〕(計 3 件)

三宅紹宣、幕長戦争と西国街道、シンポジウム「幕末動乱期の西国街道」、2017 年 1 月 14 日、広島県民文化センター(広島市)

三宅紹宣、幕長戦争と厳島、厳島研究季例会、2015 年 11 月 30 日、広島大学(広島県東広島市)

三宅紹宣、長州藩奇兵隊の教育と戦術、広島史学研究会、2014 年 10 月 26 日、広島大学(広島県東広島市)

〔図書〕(計 3 件)

三宅紹宣、一般社団法人萩ものがたり、幕長戦争、2016、68

三宅紹宣、一般社団法人萩ものがたり、薩長同盟、2015、71

三宅紹宣 他、山口県、山口県史史料編幕末維新 7、2014、3-394

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅 紹宣 (MIYAKE, Tsugunobu)

広島大学・大学院教育学研究科・名誉教授

研究者番号：10124091

(2) 研究分担者

()

研究者番号：